

虻のおれい

夢野久作

青空文庫

チエ子さんは今年六つになる可愛いお嬢さんでした。

ある日裏のお庭で一人でおとなしく遊んでいますと、

「ブルブルブルブル」

と変な歌のような声がきこえました。

何だろうとそこいらを見まわしますと、その白壁によせかけてあったサイダーの瓶ビンに一匹の虻あぶが落ち込んで、ブルンブルンと狂いまわりながら、

「ドウゾ助けて下さい。ドウゾ助けて下さい」

と言っています。

チエ子さんはすぐに走って行ってその瓶を取り上げて、口のと

ころからのぞきながら、

「虻さん虻さん、どうしたの」

と言いました。

虻は狂いまわってビンのガラスのアツチコツチへぶつかりながら、

「どうしてか、落ち込みましたところが、出て行かなくなりま
した。助けて下さい、助けて下さい」

と泣いて狂いまわります。

チエ子さんは笑い出しました。

「虻さん、お前はバカだねえ。上の方に穴があるじゃないか。そ
う、あたしの声が聞こえるでしょう。その方へ来れば逃げられる

よ。横の方へ行ってもダメだよ。ガラスがあるから」

と言いましたが、虻はもう夢中になって、

「どこですか、どこですか」

と狂いまわるばかりです。

チエ子さんは虻が可哀そうになりました。どうかして助けてやりたいと思つて、そこいらに落ちていた棒切れを拾つて上から突込んで上の方へ追いやろうとしましたが、虻はどうしても上の方へ来ません。うっかりすると棒にさわつて殺されそうになります。チエ子さんは困つてしまいました。どうして助けてやろうかといろいろ考えました。

上から息を吹きこんだり、瓶をさかさまにして打ちふったりし

ましたが、蛇はなかなか口の方へ来ません。やつぱり横の方へ横の方へと飛んでは打^{ぶつ}かり、打かつては飛んで、死ぬ程苦しんでいます。

チエ子さんは又考えました。

どうかして助けたいと一所懸命に考えましたが、とうとう一つうまいことを考え出しまして、瓶を手を持ったままお台所の方へ走って行きました。

チエ子さんは台所に行つて、サイダーを飲むときの麦わらとコップを一つお母さまから貸していただきました。

そのコップに水を入れて麦わらで吸い取つて、蛇がジツとしているときにすこしずつ瓶の中に吹き込んでやりますと、蛇は水が

こわいので段々上の方へやって来ました。

チエ子さんは喜んでもう一いき水を吹いてみますと、どうしたものか虻は又あわて出してブルブルと飛ぶ拍子に水の中へ落ち込んでしまいました。

チエ子さんはあわてて瓶をさかさまにしますと、水と一諸に虻も流れ出て、ビショビショに濡れた羽根ぬを引きずりながら苦しそうに地べたの上をはい出しましたが、やがて水のないところへ来て羽根をブルブルとふるわしたと思うと、

「ありがとうございます。チエ子さん。このおれいはいつかきつといたします」

と言ううちにブーンと飛んで行きました。

「お母さん、お母さん。チエ子は蛇を助けました。サイダーの瓶の中に落ちていたのを水を入れて外に出してやりました」

とチエ子さんは大喜びをしながらお母さんにお話しました。

「そう。チエ子さんはお利口ね。けれども蛇は刺しますから、これからいじらないようになさい」

と言われました。

「いいえ。お母さん。あの蛇は、チエ子にありがとうってお礼を言っ
て逃げて行きましたのよ。ですからもうあたしは刺さないの
よ」

とまじめになって言いました。

お母さんはこれをおききになって大そうお笑いになりました。
チエ子さんは虻とお話したことをいつまでも本当にしております。
た。

それからいく日も経^たつてから、チエ子さんがお座敷でうたたね
をしていた間にお母さまはちよつとお買物に行かれました。

その留守の事でした。

お台所の方から一人の泥棒が入って来まして、チエ子さんが寝
ているのを見つけますと、つかつかと近寄ってゆすぶり起しまし
た。

チエ子さんはビックリして眼をさしますと、眼の前に気味の
悪い顔をした大きな男がニヤニヤ笑って立っております。

チエ子さんは眼をこすりながら、

「おじさんだあれ」

と言いました。

泥棒はやっぱりニヤニヤ笑いながら、

「可愛いお嬢さんだね。いい子だからお金はどこに仕舞ってあるか教えておくれ」

と言いました。チエ子さんは眼をパチパチさせて泣き出しそうな顔をしながら、

「あたし知らない。おじさんはどこの人？」

と尋ねました。

泥棒はこわい顔になってふところからピカピカ光る庖丁を出し

て見せながら、

「泣いたらきかないぞ。さ、お前のお母さんはお金をどこに仕舞っているか。言わないとこれで殺してしまうぞ」

と言いました。

チエ子さんは、

「お母さん」

と泣きながら逃げ出しました。

「このやつ、逃げたな」

と泥棒はいきなり追っかけてチエ子さんを捕まえようとした。しかし、
た。

その時ブーンと唸^{うな}って一匹の虻が飛んで来て、泥棒の眼の前で

ブルンブルンブルンとまわり始めました。

泥棒は邪魔になるので、

「こんちくしょう、こんちくしょう」

と払い除^のけようとしたが、なかなか払い除けられません。
そのうちにチエ子さんは、

「お母さん、お母さん」

と叫びながら障子を開けてお縁の方に逃げて行きます。

「逃^がしてなるものか」

と泥棒は一所懸命となつて、とうとう蛇をタタキ落として追っかけてゆきました。

そうすると蛇はタタキ落とされてちよつと死んだようになりま

したが、又飛び上って泥棒の足へ飛びついて力一パイ喰いつきま
した。

「アイタツ」

と泥棒はうしろ向きに立ち止まる拍子にお縁から足をすべにらして、
石の上に落つこちて頭をぶつて眼をまわしてしまいました。

そのうちにチエ子さんは表へ出て、通りがかりのお巡査まわりさんに
この事を言いましたので、泥棒はすぐに縛られてしまいました。

お母さんがお帰りになってこのお話をおききになると、涙をこ
ぼしてチエ子さんを抱きしめておよろこびになりました。

その時にチエ子さんはお縁側を見ると一匹の虻はが死んで落ちて
おりました。

「お母さん、御覧なさい。この間の蛇が泥棒を刺したのよ。あたしが助けてやったお礼をしてくれたのよ」

と言いました。

お母さんはおうなずきになりました。そうして晩方お父さんがお帰りになってお母さんがこのお話をされますと、お父さまはチエ子の頭を撫でながら、

「あぶとお話した子は世界中でチエ子一人だろう」

とお笑いになりました。

チエ子さんは蛇のお墓を作ってやりました。

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集」三一書房

1970（昭和45）年1月31日第1版第1刷発行

1992（平成4）年2月29日第1版第12刷発行

初出：「九州日報」

1925（大正14）年9月13-15日

※底本の解題によれば、初出時の署名は「香俱土三鳥」です。

入力：川山隆

校正：土屋隆

2007年7月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

虻のおれい

夢野久作

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>